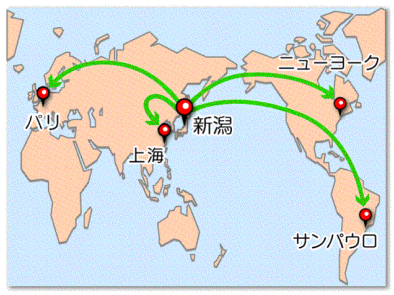
(C)新潟日報社

グローバル にいがた

国際交流拠点から

新潟日報社が開設した米ニューヨーク(NY)、ブラジル・サンパウロ、中国・上海、欧州(パリ)の国際交流拠点などを通じ、海外で暮らす本県関係者から現地の様子をリポートしてもらい、毎月第1月曜日に紹介しています。また、新潟日報ホームページ「モア」にも掲載し、感想や意見を受け付けています。



次回は2月12日付で掲載する予定です。

from NY

藤原　雅彦さん
＝弥彦村出身＝

海外経験 子の財産に

1998年、新潟大学在学中に初の海外旅行でニューヨークを訪れた。ジュリアーニ氏が市長に就任し、治安改善に取り組んでいたおかげもあり、旅行前のイメージよりは安全に感じたが、それでも夜に街を歩くことは怖いと感じたものである。

あれから20年。まさか自分がニューヨークで仕事をすることになるとは思わなかった。また、家族でこの街で生活するとは夢にも思わなかった。

私が仕事の都合でニューヨークに赴任したのは2016年7月。家族は同年11月に来て、こちらでの生活も丸1年が経過した。自宅はマンハッタンとハドソン川を挟んで対岸のニュージャージー州にある。マンハッタンにバスと地下鉄で約1時間かけて通勤する生活にもすっかり慣れた。

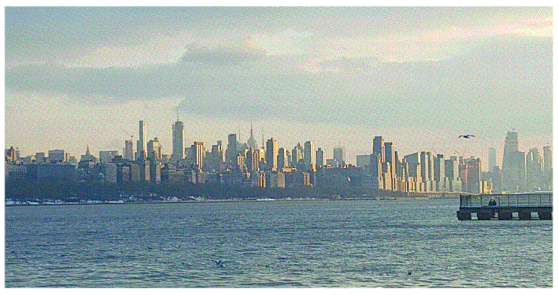
マンハッタンの至る所にはNYPD(ニューヨーク市警察)の警察官が配置されており、普通に生活している限りは、身の危険を感じたことは一度もない。

2人の子供たちは現在、自宅近所の現地校に通っている。小学校3年生の長男のクラスメートはスペイン、トルコ、イタリア、ロシア、ドミニカ共和国、韓国、中国、そして米国と、さまざまな国籍から構成された友人環境の中で、毎日元気に通学している。

米国は一握りの天才が国の経済を支えていると も言われている。グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾンなどITジャイアントと呼ばれる企業の創設者を輩出した国でもあり、その背景には多種多様な人種、文化が融合してイノベーションが生まれているのではないかと考えさせられる。

グローバル化が進む中で、多様性に富んだ米国、ニューヨークでの経験は子供たちにとって大きな財産になると信じている。最近では2人の子供たちは自然と英語を話すことが増えてきて、現地の文化・慣習にも溶け込んでいる。何より、この場所で知り合った友人たちといつか国境を超えてもつながり続ける時代が来た時、彼らには無限の可能性が広がることだろう。

(藤原さんは1976年生まれ。IT企業の営業職としてNYに駐在しています)



ハドソン川から望むマンハッタンの風景

from 上海

猪又　靖男さん
＝糸魚川市出身＝

「貴人」の導き 道開く

私が中国へ行くことになったのは、尊敬する作家で経営コンサルタントの邱永漢先生の本の中に上海の工場勤務者募集の記事を見つけたのがきっかけでした。軽い気持ちで応募した後、恐る恐る東京の邱永漢事務所に伺うと、邱先生が穏やかな顔で私を迎えてくれました。

面談で邱先生は、私の応募用紙のアピール文(先生と同郷の台湾人女性とお付き合いしている)に触れられ、「君はいつ結婚するのか? 早く籍を入れなさい」とはっきりおっしゃったのを覚えています。

しばらくして、すぐにでも上海に行くようにとの話を受け、慌てて準備を開始。いざ海外に行くとなると、勤務先の退職、彼女との関係、引っ越しの準備などやることが山ほどあり、とてもすぐには行けない状態でしたが、この機に乗じ結婚式を挙げ、引っ越し荷物をまとめ、2週間程度で中国へ出発することができました。

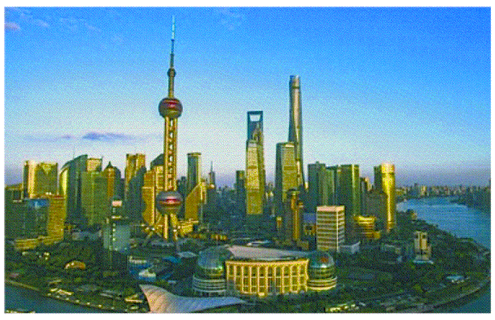
2002年2月、期待を胸に降り立った上海は、まさに建設ラッシュのさなか。工場がある郊外へと続く道の両脇は、家を取り壊した赤レンガの瓦礫(がれき)の山だらけ。私は何という所に来てしまったのかと、これから先に強い不安を感じたのを昨日のことのように覚えています。

あれから15年、上海の街は大きく様変わりし、高層ビルの数は東京を大きく超え、国際都市へと変わりました。私自身も、工場勤務後、邱先生に導かれるまま、先生が投資するコーヒーショップの管理、そして、先生との縁から環境事業関連の上海事務所と移り、今に至っております。

私がコーヒーショップを管理していた頃、中国ではコーヒーを楽しむ方が少なく、開店当初は苦戦しました。今では世界各国のコーヒー豆を取り扱うカフェが増え、改めて邱先生の慧眼(けいがん)に驚かされます。

邱先生が亡くなられてからはや5年。私にとって邱先生は、人生の節目に現れた貴人(中国ではチャンスをくれる人の意味)でした。今後も人との出会いを大切に、未来に夢を持って人生を歩みたいと思います。

(猪又さんは1968年生まれ。環境事業関連会社で働いています)



上海の代表的な景色「上海バンド」

from サンパウロ

鈴木　雅夫さん
＝サンパウロ新聞社長＝

日本に関心 長蛇の列

日本の外務省は「世界のより多くの人々に対して『世界を豊かにする日本』を表現・発信することにより、日本への深い理解と共感の裾野(すその)を広げていく」というコンセプトで、サンパウロ、ロサンゼルス、ロンドンの3都市に「ジャパン・ハウス」を開設することを決めた。その中で最も早く昨年オープンしたのがサンパウロだった。

当初の計画では、年間15万人の入場者を目標にしていたが、開館からわずか2カ月弱で15万人を突破し、関係者はブラジル社会の日本に対する関心の高さに驚いた。サンパウロの目抜き通りの「パウリスタ大通り」にあるという立地条件の良さだけではない。ブラジルに移住した日本人が長年にわたって築き上げてきた信頼や貢献が大きく影響している。

昨年4月末の開会式には、テメル大統領らが列席した。「われわれは日本人から学ばなければならない多くのことがある。ジャパン・ハウスは必ずやその発信拠点となるだろう」(テメル大統領)、「日本人が、その国民という最も貴重な財産を(移住者として)サンパウロに送ってくれたことに重ねて感謝したい」(アルキミン州知事)、「サンパウロの日本人は規律、勤勉、家族愛、伝統の尊重という美徳を示しながらブラジル社会と絆を深めてきた」(ドリア・サンパウロ市長)と褒めたたえた。

日本からの移住者がブラジルに持ち込んだのは「精神」だけではない。伝統文化、スポーツ、農業技術などの分野で貢献してきた。しかし、日本人移住者が途絶えていることを知るブラジル社会は「ジャパン・ハウスは日本の何を持ち込んでくるのだろうか」という大きな期待と関心がある。だからこそ、長蛇の列ができたのだ。

ジャパン・ハウスが紹介するのは日本の最先端技術だけではない。日本の歴史と風土の中で培われてきた伝統に支えられた技術は、まだまだ知られていないし、世界に十分通用する。それを実証するのがジャパン・ハウスだと思っている。

(鈴木さんは母が三条市出身で新潟県人会員です)

ジャパン・ハウス前で入場を待つ長蛇の列。後ろに見えるのは日本産のヒノキを使った装飾

from パリ

清水　伸さん
＝佐渡市出身＝

日仏協力 文化を発信

明けましておめでとうございます。フランスは日本との友好を開いて今年で160年を迎えました。この節目に両国が協力し、パリを会場に、日本の文化力を世界へアピールすることになりました。「ジャポニスム2018 響きあう魂」というタイトルです。

「ジャポニスム」という言葉が生まれたのは昔のパリでした。1867年の第2回パリ万博に日本は初参加。欧州の圧倒的な産業力に対抗して、庶民の浮世絵版画や洗練された工芸品をぶつけました。その魅惑的な美術品への反響が巻き起こり、「ジャポニスム」は日本をたたえる驚きの言葉だったのです。

私たちが親しむ印象派のモネやゴッホも、浮世絵や北斎に感動し、早速絵に描いています。長い時を経て、今年は伊藤若冲がパリにやって来ます。かつてのパリ万博会場に、時空を超えて若冲ワールドがよみがえるのです。さらに伝統的な能、狂言、歌舞伎と現代のデジタル・テクノ映像、アート・デザイン、建築、映画、演劇などの異なるジャンルがつながります。江戸から現代までを構成する日本の「新しい魂」に対してパリはどんな響きでこたえるでしょうか。

パリ日本文化会館の活動が市民に親しまれるようになって昨年で20年になりました。立ち上げに奔走した杉浦勉さんが今度は館長として新鮮な運営デザインを発揮しています。新潟からの催しも続き、「蕗谷虹児展」「佐渡版画甲子園」「新潟菓匠による笹餅」「燕・三条伝統と革新の融合」などがとても良かったです。

パリで仕事に精を出す私たち新潟の作家も、その成果を近々新潟で見ていただけることになりました。新潟市の新津美術館と秋葉区文化会館で開催される「パリに生きる新潟の作家たち」(1月27日～3月11日)と「デュオ・リサイタル」(3月4日)です。フランスで新潟の感覚をどんな「ジャポニスム」に変身させているでしょうか。ご期待ください。

(清水さんは1947年佐渡市生まれの画家。新潟・フランス協会パリ支部副支部長です)

エッフェル塔の近く、セーヌ川に面して建つパリ日本文化会館